

RE : 03

— ふえらりいず すとおりに —



「じゃあ二人とも 準備は良いかい？」

「はいっ」

「は……はい……」

「ん？ ひふみちゃん？ 浮かない顔だね どうしたんだい？」

「あ……その……なにが……かは……分らないんです……けど……」

「コシって……なにか違うような……」

わしっ

「とてつもなく……ダメなコトをしてるよっな……不安感のたいなモノが……」
「HA HA HA!! それは気のせ……」
「なに言ってるんですか ひふみ先輩!」
「うほっ……」

「でも……わたし……。その……。こういう経験……。なくて……。
ちゃんと出来るか……。どうか……。」
「だいじょーぶ！ 三人がちゃんと汚ちんぽをペロペロして気持ち良く出来るのかっ?!
それを確認するために今回オジさんがスペシャルアドバイザーとして雇われたってわけだ」
「出来なくてもちゃんと教えてあげるから心配しないで、イイよ」
「あ……。はい……。」
「よろしくお願いしますっ！」

「てか青葉ちゃん……。」
「はい？」
「さっきから当然のように握ってるその手……。」
「そろそろ止めてくれないかな……。じやないと……。」
「じやないと？」



「もう まだなんにもしてないのに出しちゃってるじゃないですかあ
こんなんで本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫 大丈夫！ 青葉ちゃん達みたいなかワイイ女の子を前にしたら
何度だって不死鳥の如く蘇るんさあ！」

（こ・こ・この子はなんか変な方向に振れちゃったかもしれな・い・な・）
（今 一瞬青葉ちゃんから得体の知れない妖気を感じたよう・な・）
（やっばりコワイっ！！）

「本当ですか？ それじゃあこのまま続けちゃっても大丈夫ですよわ？」

「だ・大・大丈夫だよ・」
「じゃあ私がちゃんと汚口で汚ちんぽ気持ち良くなるか確かめてくださいわ」



「それにしてもこの汚ちんぽ。。。すっごく臭いんですけど。。。恥垢もいっぱい付いてますし。。。」

「今日のヨト分かってたハズなのに、ちゃんと洗ってこなかったんですか？」

「女の子にわざと恥垢だらけの臭くて汚れた汚チンポを舐めさせようとするなんて人間のクズですね。。。」

「あ。。。はい。。。ごめんなさい。。。」

「このガキ。。。初対面の人間をクズ呼ばわりするなんて。。。オジさん大興奮じゃないかっ!!!」

「潜在的にSっ気が強かったせいだろうな」

ス
ー
ス
ー
ス

「まあ、何日も泊り込んでお風呂にも入ってないゲロクツ汚ちんぽをぶら下げて来る人もいるかもしれませんがし
そのシミュレーションだと思えば問題無いですかねえ」

「それに。。。こんなに臭いのには。。。なんだかこのニオイ嗅いでから

少し興奮しちゃってるみたいなんですよ。嫌いじゃないなあ。。。このニオイ。。。」

「はああ。。。それじゃあペロペロ始めますね。。。」

「あ。。。お願いします。。。」

「なんだかいつの間にか主導権を握られてしまっている。。。が。。。まあエエか」

「気持ち良くしちやうついでにキレイに汚掃除もしてあげますね。・・・れるっ。・・。」
「ああ。・・・ニオイが鼻から抜けちやって臭すぎでクラクラしてきちゃいます」
「あはっ。・・・汚ちんぽの汚れが唾液で溶けてヌルヌルデロデロしてきました。・・。」
「んれるっ。・・・全部舌先でこそぎ取ってあげますね。・・・んっ。・・・ねる。・・・れるっ。・・。」

ハハハ

ヒクッ

ねりねり

ねるねる

ん。



「んんっ。・・・すごくにがしよっぱい。・・・でもこれ。・・・ちよっと美味しいかも。・・。」
「コレ。・・・食べちやってもイイですか？ イイですよ？ 食べちやいますね。・・。」
「えっ？」
「ああ。・・・美味しい。・・・こんなの絶対美味しくないはずなのに。・・・汚ちんぽのカスなのに。・・。」
「。・・。こいつあやべえな。・・。とんだ変態さんだ。・・。」

「んはっ。。。オジさんの大きすぎて。。。先っぽ啜えてペロペロするので精一杯。。。です。。。」
「先っぽの割れ目の中也キレイにしておきますね。。。れる。。。れる。。。」
「あっ。。。そこは優しくね。。。敏感だから。。。」
「大丈夫。。。任せてください。。。ちやんとインターネットで色々勉強して来ましたから。。。」
「でも私が見た動画や画像にはこんなに大きい汚ちんぽは無かったけど。。。」
「大きいだけで気持ちいい場所なんかは一緒のハズだから大丈夫。。。だよね？」
「エツチなモノたくさん見て私もエツチな気分になっちゃったけど」
「汚仕事だから集中するために汚マ○コ弄るのもガマンして勉強したんだ。。。」
「その成果をしっかりと出さなきゃ。。。」

「んっ！ そろそろイキそうだよ青葉ちゃん！」
「えっ?! もうですか?! さっき出したばかりなのに?! 本当に早漏さんなんですね。。。」
「このまま汚口に出すね! 全部中で受け止めてね!」
「しかたないですね。。。どうぞ。。。」
「ああ! イクっ! 出るよ! 汚口に出すよっ!!!」

あまん

わろわろ

はむはむ

んっ

「んっ……んふう……うっ……んぐっ……」

「奥に残ってるのも全部吸い出してね」

「ふあい……ちゅ……ちゅう……ちゅる……ちゅる……」

「そうそう……吸ってえ……全部吸い出してえ……」

「うん……イイよ……じゃあそれを全部飲……」

「んぐっ……んぐっ……くっ……くん……うっ……」

「……んでくれてるね……優秀だね……」

「んぐっ……んぐっ……んぐっ……けぶっ……んぐっ……」



「んぐっ……。せーしってこんなに飲みにくいモノだったんですね……」
「それに思ってたよりずっと臭い……。青臭い……。ような磯臭いような……。臭いけど……。なんだかすごくエツチなニオイ……。」

「とても気持ち良かったよ青葉ちゃん ちゃんと予習してきたんだね」
「これならすぐに汚仕事を始めても大丈夫だよ」

はな

しんぞ

はな

「本当ですか?! 良かったあ 極太魚肉ソーセージで練習してきました!」
「(そんなモノで練習してきたのか……)」
「私が合格ってコトは……。じゃあ次はひふみ先輩の番ですね」

「えっ……。あつ……。でも……。私……」
「青葉ちゃんみたいだ……。予習も……。練習もしてない……。し……。うまく……。できない……。と……。思う……。から……」

「大丈夫 さつきも言ったけどちゃんと教えてあげるよ」

「そ……。それに……。やっぱり……。コレを……。く……。回に入れる……。なんて……」
（しかもあんなモノまで飲むなんて……。やっぱり私には……）

うっうっ

んんん

んんん



「ひっ！」

「大丈夫です 私がキレイにしておいたので、もう臭くないハズです」

「そういう問題じゃっ……うっ！」

（うえっ!! 臭い……臭いよっ……）

（確かに汚れはマシになったのかもしれないけど……ニオイが……青葉ちゃんの……青葉ちゃんのよだれが乾き始めて逆にスゴク臭くなっちゃってるよお……）

ゴクッ

「ほらほら ひふみ先輩 ペロペロしちゃってください

練習して一緒に立派なペロリストになりましょう！」

（私そんなモノになりたくないよ……でも……これが私の汚仕事なんだよね……青葉ちゃんだって頑張ってるんだから……私も頑張らないと……なんだよね？）

ひっ

うっ

グッ

「こ……どう……ですか……？」

「うん……そんな感じ……まずは舐めるコトに馴れようね」

「気持ち良いとかそんなのは後回し 好きなように自分のペースで舐めてごらん」

「……はい……」

「カリ首の裏にあるスジを中心に刺激してあげると気持ち良いらしいですよ」

「オジさんもさつきそこ舐める度にピクピクしてましたし」

「……ここ……らへん……？」

「おうふっ！」

「……っ！ ああ……すごい……ピクンって跳ねた……気持ち良い……のかな？」

「あっ……なんか先っぽから透明でヌルヌルしたのが……」

「なにこれ……少ししよっぱくて……美味しい……かも……」

「なんかノツてきましたたねひふみ先輩 すごく美味しそうにペロペロしてますよ」
「っ?! おっ……美味しくなんか……ない……」
「まあまあ 照れなくても良いじゃないですか 透明な汚汁……私も美味しかったですし」
「なっ?! パレてる……恥ずかしい……」
「舐めるのに馴れてきたのなら今度はオジさんの目を見つめてあげましょう」
「男の人は見つめられたまま汚ちんぽ啜えられるのがたまらなく良いらしいですよ？」

はあ はあ

ピク

ピク

ピク

んっ

「……どう？」
（ぐはっ！ 確かにたまらんっ！）

（あっ……なんか更に硬く……。やっぱり見つめられると良いんだ……。すごいな……。青葉ちゃん……）

「たまに先っぽや根元の方まで舌を這わせてあげるのも忘れないでください」

「うん……。こんな感じ……。かな……」
（俺の出番無えなおい……。がしかしぐっじよぶ青葉ちゃん！）

（この透明な美味しいヌルヌルを全体に塗り広げれば……。もっと気持ちよさそう……）

「すごいじゃないですかひふみ先輩 すごく上手なんじゃないですか？
だっさっきからオジさんのピクピクが止まらないですもん」
「ホント？ ちゃんと……。出来る……。？」
「上手だよひふみちゃん ちゃんと気持ち良いよ……」
（そうなんだ……。私ちゃんと出来るんだ……。ちよっとうれしいかも……）
「それじゃあ次は啞えちゃいましょうよ」
「ひふみ先輩がどんな顔で汚ちんぽ啞えるのか見てみたいです」

んんんん

「ロロ」
「ロロ」

ピク

ピク



「はむっ……んぐっ……んっ……ぬるっ……ねるっ……」
（ああ……大きい……やっぱり私も先っほしか唾えられない……）」

「はああ……ひふみ先輩が……ひふみ先輩が汚ちんぽ唾えてる……」

「そ……そんなに……見ないで……恥ず……かしい……」

「ああ……とてもエッチいです……」

ひふみ先輩のフエラ顔……とてもエッチいですよお……」

「そ……そんなコト……ない……私……」

エ……エツチな顔なんて……してない……よお……」

「ああ……もうダメです……やっぱり我慢できない……」

私も一緒だっ……はむん……」

はむん

ぬん

ん

ふん

はむん

「あ　こら青葉ちゃん　ひふみちゃんが練習してるのに邪魔しちゃダメでしょ？」

「無理です。。。ちゅぶ。。。とても我慢なんてできませんよお。。。ちゅぶ。。。」

「あ。。。青葉ちゃん。。。」

「ああ。。。ひふみ先輩のよだれが垂れてきて。。。ひふみ先輩の味。。。」

（そんな。。。やだ。。。私のよだれを。。。）

「ひふみ先輩のよだれソースがかかった汚ちんぽ美味しいです。。。」

「もう青葉ちゃんたらあ　しようがないなあ

「じゃあ二人で仲良くおしゃぶりしてもらおうかな」

「ふあらー」



「ひふみちゃんも大分馴れてきたみたいだね」
「汚ちゃんほに吸い付く顔がどんどんエッチくなってきてるよ
この調子なら立派にフェラリーダーも務められそうだね」
「んっ……本当ですか？ それなら……良かった……です」

「わ……私……今そんなにエッチな顔してるの？」
「どんな顔で汚ちゃんほに吸い付いてるの？ ……自分じゃわからない……」
「でも……青葉ちゃんも……エッチな顔してる……私もこんな……」
「青葉ちゃん……はもう全然話聞いてないねえ……」



（ああ……すごい……ひふみ先輩のよだね……甘くて美味しい……
もっとな……もっとな噛めたら……）

（このまま上に行けばひふみ先輩の汚口が……
ああ……あの汚口から直接……）
「ひふみ先輩……ひふみ先輩……ひふみ先輩……せんばあい……」





「二人で盛り上がったってトロ悪いけど。。。オオさんもう出ちゃいそつだよ。。。」

「さあ、どっちの汚回に出して欲しいや」

「はいはい、私の汚回にお願ひしますっ〜」

「あっ。。。私は大丈夫なんで青葉ちゃんに。。。」

「おーけー ひふみちゃん汚回開けて」

「えっ？ いや青葉ちゃん。。。」

「聞いてみただけだよ だってひふみちゃんまだ飲んでないでしょっ」

「フェラチオは精子飲むまでがフェラチオだよ！」

「そ。。。そんな。。。私。。。」

「ほらひふみちゃん 早く啜えて もうすぐ出さうよ」

はっ はっ

はっ はっ

んっ

んっ

んっ

「よし準備は良いわ?! 出すよー ひみぢちゃんのお酒の中は田んぼよー」
「んんっ……んぐっ……んみう……うなほ……」
「いやあ……出されちゃう……奥の欄干お酒は無難なわゆる……」
「ごぼさないように ちゃんと全部飲んでわっー」
「うっ……んんんんんんんっ!!」
「つてえええ!!」



はっん
はっん
はっん

んん

んん



www.moe-animenews.com



「ああ……。ひふみちゃん……。こぼさないようにって言ったのに
 喰せちやったんだねえ……。初めてだから仕方ないかも……。」
 「けほっ……。けほっ……。こ……。こめんを……。さい……。けほっ……。」
 「じゃあ代わりに青葉ちゃん 残った汚汁を全部吸い取ってくれるかな」
 「はいっー了解ですっー」

なま
なま

かば

なま
なま
かば
かば
かば
かば



「それでは。。。いただきます。。。あむっ」

むちゅうううううううううう

はま

ずんずん
あむあむ

でんか

はま



「ひふみ先輩……お口開けてください……
自分で飲みたいですが……私の分もさし上げます……」

「あっ……そんな……んっ……」

「私のよだれもいっぱい混ぜときますんで一緒に飲んでくださいね……んええ……」

「んんっ……んっ……んあ……」

「さあ……飲んでください……せーし飲んでください……
せーし飲んでるひふみ先輩の顔が見たいです……」

はあ

はあ

はあ

はあ

ぞろぞろお

んあ

んぐっ。。。きゅ。。。きゅ。。。んぐっ。。。んぐっ。。。きゅ。。。
「ああ。。。飲んでる。。。ひふみ先輩がせーし飲んでる。。。」
んぐっ。。。本当だ。。。すぐく喉にからんでくる。。。飲みにくい。。。」

「もっと見せてください せーし飲んでるひふみ先輩の顔。。。もっと見せてください」
「すーい。。。せーし飲んでるひふみ先輩の顔。。。とってもエツチでステキです。。。」
（青。。。葉。。。ちゃん。。。）



「今飲み込んだせーしは栄養分としてひふみ先輩の血となり肉となり骨となっっちゃうんですね……
そう思うとなんだか興奮してきちゃいます……」

「そうやってせーしだけで作られたひふみ先輩……見てみたいなあ……」

(なに言ってるの？ あ……青葉ちゃん……)

「そうだー 今日からひふみ先輩はせーししか食べちゃダメですー」

「えっ？ なっ……」

んはな

はな

「もう他に何も食べなくても良いように
毎日ココでいっぱいいっぱいせーし食べさせてもらいましょー！」
「そしてひふみ先輩の身体をせーしだけで作られたエッチな身体にしちゃうんです」

「そっ……そんなコトできるわけ……」

「ん？ せーしだけで不満なら汚ちんほのカスも食べて良いですよっ」

「いや……そういうコトじゃ……」

「どうしてかなので、これからはいっぱいいっぱいせーし食入させてもらえなよっ！
もっとももっと鍛えてもらわないとダメですねー」

「わ……私……そんなコト……しなによ？ しなよ？ しなよ？ ……お……お……」



「なんだか分からないけど青葉ちゃんのその狂気じみた発想・・・イイね!!」
「そういうコトならおじさんも全力で応援するよっ!」
「とりあえずひみちちゃんの手腹がいっぱいになるまでとんとんイっちゃうぞっ!」
「おとっ...んぐっ!!」
「はいっ...とんとんイっちゃいましょう!」
「(5) いやあ...わ...私...これをどうするのっやうのおお!!」

完

はあ

はあ

はあ

んん

はあ

んん